

## F. その他

## ④その他

## ●京都大学 地球環境学舎

## 「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」の事例 &lt;人社系&gt;

## 具体的に何を実施し、何が困難であったのか

本教育プログラムでは「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」というコミュニケーション能力、およびそれに参画する学生のマネジメント能力の育成を目的とした。プロジェクトの成果として、これらの能力育成のためのプロジェクトワークにすべての学生が参加してはいるが、こういった類の能力向上を定量的に証明する方法が確立できておらず、効果を数値データとして表すことが難しい。

## 苦労したこと、困難であったこと、具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

具体的な成果として、分野横断型の修士論文研究の数自体は増加しつつあるが、サンプル数が少なく学位論文の質自体を評価することが難しいこと、コミュニケーション能力やマネジメント能力は、数値データとして評価することが難しいことが要因として挙げられる。そのため、修了生のアンケートにおいては概ね高い評価がなされているが、能力の向上については十分な評価にいたっていない段階である。

## どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

学生の主体性を確保しつつも、各プロジェクトワークに教員がオブザーバーとして参画することによってプロジェクト活動の質の向上を図る、また成果発表会の公開など、質の向上に向けた取組みは一定の成果を上げたと考えられる。その一方で、「環境コミュニケーション・リテラシーの向上」がどの程度達成できたかの明確化については上述したように課題が残り、今後の展開の中で方策を検討している。

## ●愛媛大学 医学系研究科医学専攻

## 「地域・大学一体型先導的研究者育成システム」の事例 &lt;医療系&gt;

## 具体的に何を実施し、何が困難であったのか

大学院医学専攻の根本的な目標は、医学・生物学あるいはサイエンス全般の進歩に貢献し、地域医療の高度化・効率化を果たし、国民の健康増進に明確に寄与できるような次世代の指導的人材を育てることである。この目標を象徴するスローガンと

して愛媛大学医学部/医学系研究科では「患者から学び、患者に還元する医学・医療」を掲げているが、このスローガンに合致するような大学院教育を成し遂げることが困難であった。

**苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか**

大学院G P予算によって大学院は活性化、定員割れは解消、研究業績も増えた。しかし、全般的には「ある程度の年齢になったから、そろそろ学位を取ろうか」という臨床医の学位取得を促進したに過ぎないと感じられる。この3年間での学位取得者、あるいは、その研究業績をみて、医学・生物学の進歩に明確に貢献し、次世代を担う研究者・指導者が育った、ということは難しい。大学院生の年齢は概ね30才を超えており、多くに家族があること、大学院入学の目的が学位取得に殆ど限定されていること、将来にわたって大学人として生きていく意志はない大学院生が大部分であること、などに起因する困難である。

**どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか**

医学部独特の慣習として、学部卒業後臨床経験を積み、年余を経て始めて大学院医学専攻に入学するというものがある。この慣習では大学院入学者の年齢が高すぎて、医学生物学の進歩に貢献する若い人材を育てるのはそもそも不可能である。医学部は優秀な理系高校生を独占しておきながら、基礎医学・生物学研究者/教育者の育成を怠ってきた。これは、サイエンスに対しても国家国民に対しても大変重大な背任であり、深刻な反省が必要である。このことを反省し、大学院教育の根本目標を達成するために、愛媛大学独自の予算措置【愛大G P】および文科省予算【医学・医療の高度化の基盤を担う基礎研究医の養成】を受けて「医学科大学院」制度を構築・推進し、学部1年生からの人材育成を進めている。